

【巻頭言】

花菖蒲を世界に紹介したシーボルト

会長 椎野昌宏

創立 80 周年記念号でロシアのミローノヴァさんが書かれた「ロシア極東南部のノハナショウブとその種類」の記事を、大変に興味をもって読みました。特に後半の‘ロシアにおける日本のアイリス’で、花菖蒲栽培の歴史をたどったくだりは、私にとって初めて知ったことでした。ロシアに在住している訳者の関根秀人さんがモスクワ近郊で、花菖蒲を育てていると聞いていましたが、遠い昔の 1926 ~1927 年から黒海沿岸で花菖蒲が 100 品種以上も栽培されていたということには、驚きの念を禁じえません。

花菖蒲は日本の酸性土壌を好み、高湿度の環境に適応する植物で、一般にヨーロッパなどのアルカリ性土壌と、生長開花期の低湿度に適さないとされています。米国では花菖蒲の好む土壌や湿度条件を充たす地域もあり、20 世紀始めより、花菖蒲栽培が盛んに続けられています。ミローノヴァさんの記事によると、ロシアでは黒海沿岸や沿海州南部が、花菖蒲生存の立地条件をそなえ、低温に強い性質を持った米国品種や、シベリア地域のノハナショウブの血を入れ、ロシア的花菖蒲を育成し、栽培人口を増やしつつあり、明るい未来が展望されます。

本稿では、私たちが遺産として受け継いだ花菖蒲を、日本だけのものだけでなく、世界へ飛び出す窓を開いてくれたシーボルトの業績について記し、花菖蒲愛好家の関心呼びたいと思います。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Philipp Franz von Siebold(1796-1866))については 2 度にわたり江戸末期に来日し、医学、博物学、民俗学など広範囲な面で日本の近代化に影響を与えた歴史上の人物として知られていますが、植物学の分野での貢献にはとくに優れたものがありました。

日本に較べて植物資源が少ないヨーロッパに、日本の多種多様な植物を導入し、ヨーロッパの庭園を豊かにしました。彼は日本からの植物を現地環境に適応させるため、オランダにライデン気候馴化園をつくり、そこで育て、手入れし、増殖し、販売しました。花菖蒲もその一つで、1856 年発行の‘ライデン気候馴化園の日本植物の目録と市価’に *Iris Kaempferi Sieb.* の名前で 1 種紹介されています。これはノハナショウブと思われ、後に学

名は *Iris Ensata* に変わりました。特記事項として露地栽培に適した新しい観賞用植物として紹介され、5 フランの値がついています。シーボルト死後の 1872 年に出された目録には、花菖蒲の品揃えも多くなり、21 品種も掲載されています。和名はありませんがいずれも外国語名をつけられています。全部を引用できませんが、一例をあげますと、

Iris Kaempferi Sieb. var. *Miqueri* (花菖蒲ミケリ) 価格 6 フラン

美しい紅紫色を基調とするリラ色の花卉に白い縁取りがあり、葉脈は紫色をしている。花の中心は濃褐色である。

と書かれています。ミケリは植物学者でシーボルトの膨大な収集植物の分類作業の協力者でした。彼に敬意を表して命名されました。その他の品種にも尊敬する人物や親しい人々の名前がつけられており、シーボルトは花菖蒲に親しみと大きな期待をもっていたことがうかがわれます。そして当時の江戸系花菖蒲などの和名がないのは、現地で実生された育種品種であったものと思われる。

ライデン気候馴化園の日本植物は、新しいものを求めるヨーロッパの王侯貴族や金持ちや園芸業者などの人気を呼び、注文が殺到したといわれています。米国への導入はヨーロッパより若干遅れました。幕末横浜に税関制度構築のための指導監督官として、米国政府より派遣されたトーマス・ホッグ Jr(Thomas Hogg Jr (1819-1892)) が 1869 年に、父の経営するニューヨークのホッグ園芸店に苗を送ったのが初めです。その後、日本の植物としては、ヨーロッパではアジサイやユリ類のように栽培人口はあまり増えませんでした。米国では熱心な栽培家があらわれ、盛んに育種も行い、花菖蒲園も各地に生まれました。

花菖蒲が外国の園芸市場に初めて公式に登場したのは、1856 年のライデン気候馴化園の目録であり、従ってシーボルトはその扉を開けた人と言えます。150 年以上たつて、園芸がグローバル化した現在、私たちが愛培する日本の優れた植物資源である花菖蒲がもっと裾野を広げ、世界の花となるよう願っています。